光源氏の持つ情けと召人との関係性

古田正幸

平安時代のかな文学を研究していると、用例や資料を論拠としていないにも関わらず、通説となって種々の研究の前提とされる論考が少なくないことに気付かされる。有名なところでは「色好み」を英雄視する研究や、「みやび」を『伊勢物語』を貫く理想と見做す研究などがそうであろう。いずれも、表現を論拠とした場合に追認できないこと、近年の研究動向が示すとおりであると思う。

筆者は、拙著『平安物語における侍女の研究』（笠間書院・二〇一四）所収「〈召人〉と『和泉式部日記（物語）』の女の差異」（初出二〇一二）の中で、「召人」と呼ばれる侍女の定義の検証を行った。従来の阿部秋生「召人」（『源氏物語研究序説』東京大学出版会・一九五九、初出一九五六）の定義では、身分を問わずに「男女相互の愛情関係を基礎にして始まる」とされた「召人」が、表現のうえでは摂関家の氏長者や親王などの貴人から一方的に「召された」侍女であることを指摘したものである。

その際に『源氏物語』胡蝶巻で、蛍宮や髭黒が「召人」のような侍女を持つと光源氏が非難することについて「光源氏が侍女を一方的に「召す」わけではなかった」のか「光源氏が自らのことを棚にあげて、実質的には〈召人〉がいたにも関わらず蛍宮と髭黒を糾弾した」のか、即断は避けねばならないとした。そのうえで、光源氏が無理強いしないことで玉鬘の信頼を得る文脈から、光源氏は「召人」を持たないと示唆するに留めた。断定を避けたのは、光源氏の自己正当化を恐れたためである。例えば、柏木と女三の宮の密通発覚の際、光源氏は帝の后でも状況によっては臣下との関係に許せる面がある、と考える（『新潮日本古典集成源氏物語』（以下同）若菜下、五巻二三四頁）。これは自身と藤壺の宮との関係を正当化する心の働きを示すものであろう。

しかしながら、「召人」木工の君が髭黒の北の方への仕打ちについて、髭黒に苦言を呈した際の髭黒の反応に着目すると、光源氏の言もあながち自身に都合の良いものとばかりは言えなくなる。

いかなる心にて、かやうの人にものを言ひけむ、などのみぞおぼえたまひける。情けなきことよ。（真木柱、四巻二二一頁）

傍線部「情けなきことよ」は、語り手の評言である。自ら言いかけて、木工の君を「召人」にしたにも関わらず、冷淡にしか考えることのない髭黒を、語り手は容赦なく切り捨てる。

この「情け」こそは、光源氏が持っている理想的な性格の一種ではなかったか。「中将、中務やうの人々には、ほどほどにつけつつ情けを見えたまふ」（澪標、三巻一六頁）とは、従来説で光源氏の「召人」とされてきた中将や中務などの、肉体的関係にある侍女との関係において、その身分に応じた「情け」をかける光源氏の様である。この「情け」の有無は、一方的に女性を「召人」とすることを良しとし、必要がなくなれば一方的に見下げ果てて良しとする髭黒の「情けなき」心性と対比的に捉えることが出来る。

冒頭に述べた「色好み」が理想とされた『源氏物語』の解釈史とも相まって、光源氏の女性関係はともすると物語の表現以上に破天荒なものと捉えられがちであったように思われる。しかし、光源氏自身に都合の良い傾向はあるにせよ、光源氏の性格には侍女を「召人」扱いしない優しさを認めうる部分がありそうだ。それが、明らかな「色好み」を描いて散佚した『交野少将物語』などとは異なる主人公を『源氏物語』が描き得た一つの表れかと最近は考えている。

（宮城学院女子大学日本文学科准教授）